『日本哲学思想資料集』について

Seungchul KIM(金承哲 : Professor of the Faculty of Humanities, Nanzan University)

✉ sechkim@gmail.com

(日本) 南山大学人文学部教授・南山宗教文化研究所所長。キリスト教神学、宗教間対話、宗教と文学。"A Pluralistic Pluralism : With Some Remarks on Fallibilism" The Grace of Being Fallible in Philosophy, Theology, and Religion ed. by Thomas John Hastings and Knut-Willy Sæther, Palgrave Macmillan, 2020. 『遠藤周作と探偵小説——痕跡と追跡の文学』(南山大学学術叢書)(名古屋: 教文館, 2019). "Der philosophische Glaube angesichts des religiösen Pluralismus" Andreas Cesana (Hrsg.) Kulturkonflikte und Kommunikation : Zur Aktualität von Jaspers' Philosophie Königshausen & Neuman, 2016. 『神と遺伝子——遺伝子工学時代におけるキリスト教』(東京: 教文館, 2009) 等。

On the Korean translation of *Japanese Philosophy* : *A Sourcebook*

The Nanzan Institute for Religion and Culture in Nagoya, Japan, published *Japanese Philosophy : A Sourcebook*, which was translated into Korean and published by Bogosa in 2021 as 일본철학사상자료집 (Ilbon Cheolhak Sasangjaryo Chib). The translation was carried out through the cooperation of 19 Korean scholars who specialize in Japanese religion, philosophy, literature, and so on, who are mainly affiliated with Korea University's Global Institute for Japanese Studies. We hope that this work will help many Koreans understand and access the sources of Japanese religious and philosophical thought.

Keywords *Japanese Philosophy : A Sourcebook*(日本哲学思想資料集), translation into Korean(韓国語翻訳), Japanese religion and philosophy(日本宗教と哲学), Nanzan Institute for Religion and Culture(南山宗教文化研究所)

日本の宗教・哲学思想は、どれほど韓国に紹介されまた理解されているのか。このような質問は、答えようがないほどあまりにも漠然としたものではあろう。また、たとえその質問に対する答えが否定的なものであると診断されたとしても、何かの一つの試みによってその問題点をまとめて解消するのは、いうまでもなく不可能なものである。こうした意味では、『日本哲学思想資料集』(以下『資料集』とする)が韓国語に翻訳され出版されたことについても、日本の思想について紹介する一冊の書籍が出版されたというふうに整理されてしまうかもしれない。

しかしながら、『資料集』の中身をみると、やはり今まで日本思想を紹介してくれた書籍とは、異なる次元のものとして扱ってもいいとも思われる。なぜならば、『資料集』は、古代の聖徳太子より現代の哲学思想までを網羅したものであり、それぞれの思想家より抜粋された原文には、元編集者たちの解説文がついているからである。以下においては、まずこの書籍が出版されるまでの経緯について略述したあと、この本の内容についても簡潔に紹介することにする。(以下の内容の一部は『日本哲学思想資料集』の韓国語訳として出版された『일본철학사상자료집』(2021年、보고사、1062+xxiv頁)に掲載されている、本人の『『일본철학사상자료집』의 한국어 번역과 출판에 즈음하여』からの転載された内容を含んでいることを書いておく。)

『日本哲学思想資料集』の翻訳・出版は、南山大学(日本、名古屋市所在)の「南山大学第4期国際化推進事業」の支援を受け、南山宗教文化研究所が推進してきた「日本の思想と文化を国際的に知らせるための研究拠点の確立」(2018~2021年)という研究プロジェクトの成果として行われた。この研究事業の目的は、その名称が言うように、日本の哲学と宗教、文化の思想の内容を日本の国外に発信するための学術的研究と実践にある。こうした研究活動は、1974年の創立以来、宗教間対話、文化間対話を本格的に遂行してきた南山宗教文化研究所研究活動の一環でもある。

南山宗教文化研究所は、カトリック教会の第2次バチカン公議会が採択した「キリスト教以外の他宗教に対する教会の立場」(*Nostra Aetate*)という文書の中で闡明された宗教間対話の精神を実践するために、カトリック修道会の神言会(*Societas Verbi Divini*, 英文表記は *The Society of the Divine Word*, あるいは、*Divine Word Missionaries*)によって創立された研究所である。同研究所は、これまで日本国内はもちろんのこと、海外の神学者、宗教学者、哲学者らと連携し、宗教間または文化間の対話の実践とそれに関する研究を持続的かつ重点的に推進してきた。このような伝統は、本研究所に属する研究員はもちろん、長短期間に

わたって研究所に滞在しながら研究を行う様々な分野の研究者によって今も引き継がれている。

上記の研究プロジェクトを遂行するために、この研究プロジェクトの代表訳を務めるわたしは、「韓国語で日本哲学、宗教思想を翻訳して出版する」ことにこの研究プロジェクトの具体的な目標を設定し、それに合わせて研究活動の内容を計画した。すなわち、「翻訳とは何か」について研究する理論的研究活動と、実際に日本の哲学、宗教思想を韓国語に翻訳する実践的研究活動、これら二つの軸を中心に遂行しようとした。

まず「翻訳とは何か?」という膨大なテーマへの一つのアプローチとして、私たちは翻訳の理論的研究を遂行する研究者と長年にわたって翻訳作業をしてきた研究者たちを南山宗教文化研究所に招待して、「翻訳する存在としての人間(Homo Translator)」というテーマの下で国際シンポジウムを2019年に開催した。

2

前述のように、本研究プロジェクトのもう一つの中心軸は、日本の哲学、宗教思想を韓国語に翻訳して出版すること、すなわち翻訳に関する理論的研究を実践に移す作業だった。これには、いうまでもなく、日本の哲学、宗教思想を韓国に紹介することにより、日本と韓国の相互間の理解に貢献するという意味が含まれているはずである。

このためにはまず、日本の哲学と宗教思想がどの程度翻訳また紹介されているかという現状を分析して、資料を取りまとめてみる必要があった。そこで私たちは、各分野の日本哲学と宗教、文学を専攻した韓国の研究者らを本研究所に招き、現在韓国に日本の哲学と宗教が紹介されている現状に関する研究調査の結果について発表してもらうとともに、それぞれの分野に対応する日本の研究者たちの意見を聞く、一つのワークショップを開催することにした。そのワークショップの結果に基づき、私たちは実際に翻訳作業を担っていただく韓国の研究者らに会い、具体的な翻訳作業を進めることにした。

こうした翻訳作業が本格的な軌道に乗ることができたのは、「高麗大学グローバル日本研究院」の金孝順教授と厳仁卿教授のおかげであった。両先生との数回にわたる打ち合わせにより、翻訳作業のための諸事項、すなわち翻訳者の選定と交渉、翻訳のための詳細な指針の設定、翻訳の日程、翻訳作業の統一性を保つための共同ワークショップの開催などなどを一つずつ具体化していくことができた。両先生の紹介により、「高麗大学グローバル日本研究院」と直接的・間接的に関係を持っておられる日本研究者との出会いが可能になり、それにより翻訳作業

は本格的に始動することになったのである。

この翻訳作業を円滑に進めるためには、私たちは何度も直接会って、各翻訳者の翻訳結果を共有し互いに確認することが絶対に必要であった。そのような出会いを通じて翻訳日程の確認、翻訳用語と文体の統一、読者層をどのように設定するかという問題、読者のために脚注をどの程度まで付け加えるかという仔細な問題にいたるまで、さまざまなことを相談し決定することができた。そして場合によっては翻訳担当者を新たに交渉する必要性も提起された。南山大学と高麗大学で数回行われたワークショップを通して、これらの翻訳作業は徐々に実を結ぶことになったのである

3

『資料集』は聖徳太子の「十七条憲法」から始まり、日本の「仏教伝統」、「禅仏教」、「浄土仏教」、「儒教」、「神道」、「近代講壇哲学」、「京都学派」、「20世紀哲学」、「文化と正体性」、「侍の精神」、「女性哲学者」、「美学」、「生命倫理」などを含む、名実ともに日本の宗教・哲学思想を網羅しながら、それに関連する資料とその資料に対する簡略的な解説を加えたものである。それゆえ、『資料集』は、日本の思想について研究する研究者、大学や大学院の学生はもちろんのこと、日本について知りたいと思う一般読者の関心にも対応するものであろう。いままでも日本の宗教・哲学について紹介する書籍は数多く出版されたが、この『資料集』のような種類の本はまだ韓国には紹介されなかったと思う。というのは、この『資料集』を通して、韓国人にもある程度馴染みのある日本の思想家の書いたものの原文が紹介されているからである。もちろん、本の分量には制限があるので、すべての思想家のすべての資料を載せるのは不可能である。それゆえ、この『資料集』においても、ある日本の思想家が残した資料の中からもっとも核心的だと思われる部分を抜粋して翻訳するしかなかったのである。そして、この「抜粋して翻訳する」という行為こそ、すべての理解行為に含まれている解釈学的な要素が働いているのであろう。

こうした点で、ここで一つ明記したいことがある。この『資料集』は、英語で出版された *Japanese Philosophy: A Sourcebook* (Nanzan Library of Asian Religion and Culture) (James Heisig, Thomas Kasulis, John Maraldo eds., The University of Hawai'i Press, 2011) を韓国語に翻訳したものであるが、今度の翻訳作業においては、その「資料」を英語からではなく日本語の原文から直接に翻訳した。すなわち、*Japanese Philosophy: A Sourcebook* には、日本の宗教・哲学の資料を英語に翻訳した欧米の日本研究者の解釈的立場が含まれている。これらの

事実は、日本の宗教・哲学の諸概念を英語に移す際に、欧米のキリスト教的な理解の地平が介在しているとのことを意味する。簡単な例を挙げると、「神」を‘God’に、「法」を‘Law’に英訳することにより、アジアの日本の思想体系はキリスト教的欧米の思想の文脈の中に位置づけられる。また、当然ながら、*Japanese Philosophy : A Sourcebook*の編集作業には、日本の哲学と宗教思想に対する英語圏学者の判断基準が働いているはずであり、彼らの欧米的視点と理解が反映されている。*Japanese Philosophy : A Sourcebook*の編集者や翻訳者がこうした問題を徹底的に意識していることは、*Japanese Philosophy : A Sourcebook*の‘Glossary(用語解説)’を読むことにより明確になる。この‘Glossary’の部分で、彼らは「修行」を‘cultivation’に、「方便」を‘expedient means’に英訳した理由について説明をしている。場合によっては、「言霊」や「侘」をその発音に沿ってそれぞれ‘kotodama’や‘wabi’に「表記」した理由についても説明文を加えている。それゆえ、*Japanese Philosophy : A Sourcebook*を韓国語に訳した『資料集』は、重訳という問題が最初から内在しているのである。これは、「修行」の英訳としての‘cultivation’をさらに韓国語に訳するさいに起こりうる問題のことを意味する。実に、こうした「重訳」の問題は、必ずしも否定的なものではなく、人間の最も基礎的な生き方としての理解・翻訳の行為に原初的に含まれている「地平の融合」という現象からみれば、きわめて自然的なことでもある。

それはともかく、『資料集』の翻訳においては、日本思想に対する英語の翻訳をさらに韓国語に移すということに伴われうる問題を最小限に抑えるために、*Japanese Philosophy : A Sourcebook*に掲載されている英文からではなく、その英文の元である日本語の原文を見つけて韓国語に翻訳する方法を選んだ。このようなことは、日本語の原文のすべての資料を持っているジェームズ・ハイジック博士のお力添えがなかったら不可能なことであった。英語訳には欧米の研究者の理解が反映されているものであり、多くの場合、日本語の原文を彼らならではの基準により抜粋あるいは短縮したものであった。それゆえ、それに該当する日本語原文を一つ一つ確認して韓国語に翻訳することは長い時間と努力を要することであり、場合によっては不可能な作業でもあったといえよう。が、ハイジック博士のお力添えにより、時間と労力を大幅に節約することができたのである。

このように、この『資料集』の出版には、英語圏の日本研究者の日本思想に対する理解をへたものである。このような事実は、この『資料集』の「限界」ともいえるものではあるが、逆にいうならば、『資料集』は、日本の思想を韓国語に紹介するという意味をもつと同時に、英語圏の研究者らの日本理解の断面を垣間見ることができる良い機会をも提供するのである。すべての理解の行為に内在する解釈学的の現象が、『資料集』を通して明らかになったともいえよう。

『資料集』が韓国でどのように受け入れられ、どのような反響が聞こえてくるのか。『資料集』の翻訳作業にご協力いただいた日本と韓国の同僚らとともに、期待してみたいところである。

『日本哲学思想資料集』(2021.10)